

平成 26 年介護等体験談

特別支援学校<茨木支援学校>

今回、特別支援学校での「介護等体験」を終えて、私の中では大きな認識の変化と、大事だと思ふことがあった。まず、大きな認識の変化とは、特別支援学校の明るさについてである。私は今まで特別支援学校に行ったことがなく、「障害を持つ子どもが集まる学校」という暗いイメージを持っていた。しかし、今回の自習で 180° 転換した。

私たちが教室に行くと、先生方と子どもたちは笑顔で明るく迎えてくれた。さらに授業を受けてみると、先生や子どもたちは元気に声を出したり体を動かしたりしており、とても楽しい雰囲気で行われていると感じた。

お昼ご飯の時間は、先生方は一人ずつ生徒について食事の補助をしていた。先生同士、先生と子どもとの会話が途切れることはないというほど、楽しく話をしながら食事をしていった。そのような光景を見ていると、本当に「笑顔の絶えないアットホームな場所」であるような印象を受けた。

そのような雰囲気であることもあってか、こちら側から積極的な声かけができたように思う。特別支援学校で二日間を過ごしてみて、私のイメージは「障害を持つ子どもが集まる学校」という暗いイメージから、「元気で笑顔の絶えないチャレンジ精神あふれる子どもが集まる学校」という明るいイメージに変わった。

次に、私が大事だと思ったのは、生徒とのコミュニケーション、信頼関係の大切さである。特別支援学校にはいろいろな子どもが集まっている。中には、言葉でコミュニケーションをとれる子どもがいれば、そうでない子どももいる。では、言葉でコミュニケーションをとることができない子どもとはどのように接すればよいかを考えなければならない。私は実習中、話をするができない子がいた時は、他の方法でコミュニケーションをとることを考えた。

例えば、手を握ってあげると向こうも握り返してくれるということがあった。その時、私は言葉や表情では分からなくても、こういうように体と体が触れることでコミュニケーションをとることができるということを感じた。その後は、声をかけたり手を握ったりということを積極的に行った。このように、言葉でなくてもいい、表情でなくてもいい、手を握ることのできるコミュニケーションもあるので、そのようなことを積極的に行うことが大事であると感じた。

今回の実習では生徒が帰るまでしかいることができなかったのも、生徒たちが帰った後に先生達が裏でどのような苦勞をしているのか知ることができれば、もっと充実していたのではないかと思う。しかし、今回の実習で得たものは大きいので、これをどのように学校現場に生かしていくのかを考えることがこれからの課題になるだろうと考えている。